

戯曲『大いなる館』 (3) ユージン・オニール

西澤光代(訳)

More Stately Mansions (3) Eugene O'Neill

Translated by NISHIZAWA Mitsuyo

第三幕 第一場

場面

第二幕第一場と同じ——サイモンの私的オフィス。だが、以前とは様子が異っている。即ち、家具にソファが一つ加わっている。それは正面中央に置かれていて、この部屋には大きすぎ、また、高価でけばけばしく贅沢な品であり、それ故に落ち着いていて上品かつ保守的な感じだった以前のオフィスと比べると対照的で、低俗な雰囲気になっている。右手後方にあるセアラの腰高い机の上方に、派手な金メッキの縁の鏡が掛けてあり、その机の側の右手の壁には、建築家の手による大きな図面が鉋でとめてある。その図とは、小さな湖の岸辺に建てられる邸宅のものである。にわか成金が好みそうな、田園地帯に建てる仰々しく広大な屋敷の設計図。小塔のある中世の城を基本に着想されているのだが、様々な時代様式と建築様式とを次々とごちゃ混ぜに加えていった寄せ集めという感じである。

翌1841年。真夏の早朝。

セアラが机の前の高い椅子に座って、製図道具を使って、設計図に取り組んでいる。身体は著しく官能的になり、挑発せんばかりに女性的になっている。贅沢で派手な服装。放蕩のためむくんだ顔。目の下には暗い隈。ふっくらとした唇は以前より大きく、より赤く見える。そこから窺われる性格は、頑迷なうえに著しく官能的。加えて、無慈悲で冷酷かつ貪欲である。目付きは陰しくなり狡猾で、良心的とは言い難い。明らかに、会社内でのサイモンの専門的態度を模倣し、更に歪曲された態度。即ち、その態度が示す素っ気なく無愛想で情け容赦のない率直さは男性的でさえある。その男性性と、計算され尽くした蠱惑的な女性性。セアラの態度はこの二つの特徴の間で移ろい変化する。

右手、経理室からのドアが音もなく開き、ジョウエル・ハーフォードが入って来て、ドアを後手に閉める。彼の外観は前と変わらない。依然として端正な顔で、冷たく無表情な仮面のままである。だが、態度には驚くべき変化がある。弱々しく臆病で、人目を忍ぶような雰囲気。セアラに魅惑されながら、同時に屈辱的な情感を抑えようと努めている。そのために平衡感覚が崩れたかのようなようである。しばらく、彼は部屋をぼんやりと眺めているが、セアラを見ないようにしている。セアラはジョウエルがいるのに気付いてはいるが無視している。やがてジョウエルは、セアラが一見仕事に没頭していると思って、欲望に満ちてごそこそと彼女の体の曲線を上から下までじっと眺める。

セアラ （突然爆発したかのような様子で、机の上に定規をドンと叩きつける） ぽかんと突っ立って見てないで！ ノックもしないで、よく入って来れたわね。命令は分かっている筈ね！ 覚えておいた方がいいわよ、職を失いたくなかったらね。

ジョウエル 銀行のテナードさんが、部屋の外でお待ちです。あの方の地位からして、私が自分でお知らせした方がよいと思いますのです。

セアラ あの方の地位だって？ そんなもの、今じゃサイモンの足の下だし、私の足の下でもあるのよ！

ジョウエル サイモンとの面会のことで、あなたからの手紙を受け取ったとのことですよ。

セアラ サイモンがどんな用事があるのか、私は知らないわ。私達、あの男から銀行を取り上げたのよ。ほら、サイモンはまだ来てないのよ。分かっているでしょう？

ジョウエル 兄はこのところ、毎日遅いようですね。

セアラ (強いて全く無頓着な口調で) ああ、あの人ね、年取ったお母さんを、夕方だけというでなく朝も訪ねることにしたのよ。(いきなり) 遅かったら何だって言うの？

ジョウエル 兄に待たされているのをあなたさえ気になさらないのなら。

セアラ それは一体どういう意味よ？

ジョウエル (嫉妬深く興奮しやすい性格をうっかり表わしてしまい、目をソファに据えたまま —— 冷笑して) 僕は —— 知らない訳ではないのですよ。ノックをするようにと何故そんなにしつこく言われるのか、僕が —— 侵入する前に。

セアラ (嘲笑して) だってそれが、私の仕事だもの。

ジョウエル (今や魅了されたようにセアラに目を奪われて) 仕事とは、まあ！ ええ、僕にはよく分かっていますよ、あなたが —— どんな人か。

セアラ (これを率直に楽しんで、拐かすように身体を動かし —— からかう) で、私はどんな人なの？ ねえ、ジョウエル？

ジョウエル (セアラから目を引き離そうとしながら) 僕は —— 僕はよく知ってるんだ。あなたはこの一年、兄の利権を一つずつ自

分に譲り渡させるのに署名させた。その目的のためにどんな手を使ったのかも。

セアラ 私の愛にはそれだけの値打ちがないっていうの？

ジョウエル 僕なら、そんなことに愛なんて言葉は使わない。

セアラ じゃあ、教えて。愛って一体何？

ジョウエル 巧妙に兄を騙してきたって自慢でしょうが？（声高に笑う）
騙されてきたのは、あなたの方ですよ。

セアラ そんなの嘘よ！

ジョウエル 兄はあなたがここに来るまでも、ひどいもんだったけど、ナポレオンぶり始めてから、才能をひけらかして、用心深さが全然なくなってしまった！ 兄があなたに譲渡した土地の借金を明日にでも払わなければならないとなると——何も残らない。しかし、いったん敵に実情はこうなんだと見せようものなら——

セアラ （不意に——恐れ動揺して）ええ、そうなの、ジョウエル。時々私も心配で頭がおかしくなるの。でも、あの人は止められないのよ。

ジョウエル ほんの噂だけでも充分なんです。ちょっと耳打ちするだけで。今待っているこの銀行家なんか——どんなにサイモンを憎んでいることか。薄々でも感付かれたら——

セアラ そうなの。（怯えたように）その言い方はまるであなたが——まさか、あなた、噂なんかしないわよね——！

ジョウエル 僕が？ 誰もかれもが、サイモンや自分みたいだと信じているんですか？ それに、僕がまだ株を持っているのを忘れて——まだ売りに出していないけど。でも、考えなくもないが——

セアラ （厳しく）仕事に戻って！ 時間が無駄だし、うんざりだわ！（自分の机に向き直る）

ジョウエル (機械的に右手ドアの方へ動いて行き、ドアを開けようとして、突然振り返り——怒って) 僕は、断固反対だ——あなたと兄がこのオフィスを変えて——父さんのオフィスなのに——変えてしまって——誰にも分かりかけているんだ——ニヤニヤ笑いとひそひそ話! あからさまなスキャンダルになりかけているんだ!

(ジョウエル、吃って言葉が切れる——抗がいがたいほどに魅惑されて、目はセアラに固定されている。セアラ、ジョウエルの方に向き直っている)

セアラ (微笑して——からかうように) ねえ、ジョウエル、そんな風にあたしを見るものじゃないわ。あたし、あんたの兄さんの妻なのよ。(笑う)

ジョウエル (自分と闘いながら) あなたが分からない。どうして笑うのか分からないんだ——まるで、下品な街の女みたいじゃないか。(ぐっと言葉を呑み込み、目を無理にセアラから引き離し——吃る) いや、違う! そんなつもりで言ったんじゃない——自分で自分がわからない。もうこの部屋を父さんの部屋だと思えなくなった。僕が父さんの息子だということも。だから、僕のことを許して見のがして下さい。

セアラ (憐れみつつ、怯えて) 私に分からないとでも思っているの! サイモンのせいなのよ。サイモンの望み通りのものにならなくちゃならないの。あの人の思い通りになりたがるように仕向けられているのよ! 許してあげるわ、ジョウエル。だから、私のことも許してちょうだいね。

ジョウエル 僕が? もちろんですよ、セアラ。優しくしてくれてありがとう。(ドアの方へ体を向けるが、ノブに手をかけたまま再

びセアラの身体に目を据え、欲望に駆られて) 言いたいことはただ —— 会社の株を売ってもいいときっぱり決心したのです —— つまり、あなた相手になら。考えてくれるなら、その僕と ——

(ジョウエル、言葉を切る。セアラ、からかうように笑う。ジョウエル、ドアをぐいと開け、経理室に飛び込み、ドアを後手にボタンと閉める)

セアラ (ジョウエルを見送り、満足そうに含み笑いをする。鏡に映った自分を惚れ々と眺める) こんなことは夢にも考えなかったわね —— 自分の美しさにこんな力があるなんて！ 永遠なる神にかけて —— これって父さんの口癖だったわけ —— 私は欲しければ何だって、誰からだって手に入れられる！（突然嫌悪感で身震いして、打ちひしがれて鏡から目を離す。罪悪感を感じて低い声で）神様、私をお許し下さい！ こんな事を考える私を！（自分の周りを恐ろしそうに見回す）この部屋に随分長くいるわね。あの人の欲望の中だけに生きて —— あの人のとって、生きるとは自分を売ること。愛とは情欲だと私は思い込まされた。あの人が望むのは情欲だけ —— 私も同じだと思うようにされて。そうやってしっかり掴んでなかったら、あの人を失ってしまう！ —— あの女に全部取り戻されてしまう —— （憤って挑戦的に）させるものか！ 私のキス一つで、あの女が生きてることだって忘れさせてやる。それに、ジョウエルのこと。私が思っていたってどうだっていうの？ 彼はハンサムだし。女は誰だって時には心の中で考えるものよ —— 一人の男に満足した女なんていたのかしら？（笑う —— それから不意に鏡から目を引

き離し、凄まじい嫌悪感で萎縮する) ああ、神様、お救い下さい! きっと気が変になってきているのね —— こんなでは、あの庭にいる気狂い年寄り魔女と同じじゃないの —— (肘かけ椅子から飛び降りる) サイモンはなぜ来ないのかしら? あの女が庭でサイモンにずっと夢を見させているんだわ。私を苦しめるためにわざと遅れさせて! —— ええ、待たないからね、サイモン! 一人ではね!

(セアラ、経理室の方へ行きかける。その時、後方のドアが開き、サイモンが登場。相当な変わり方である。ひどく痩せ、顔は青白く憔悴し、目は深く窪んでいる。それにも拘わらず、入って来た時の彼の表情には異様な安らぎと寛ぎがあり、心ここにあらずといった夢見る様子。セアラ、嬉しそうにほっとした声をあげ、サイモンに駆け寄り、情熱をこめて抱き締める)

ああ、あなた、とても愛してるわ! (それから緊張がぶつんと切れ、わっとすすり泣き始めて、サイモンの肩に顔を埋める)

サイモン (まだ夢から半ばしか覚めていないかのように、びくっとして当惑する —— 機械的にセアラの肩を軽く叩き、ほんやりと) さあ、ほら。(サイモン、眉をひそめて物思いに耽りながら自分の周りを見詰める。自分が現在どこにいるのか、どうやって来たのか、まだはっきりしていないかのようなのである)

セアラ (サイモンの声の調子を聞いて、たちまち泣くのをやめ、肩を掴んで顔をじっと覗き込む —— 怯えて) サイモン! あなたの言い方ってまるで —— ! (無理やり冗談めいた口調で) 私が一体誰だか分かってるの?

サイモン (白昼夢から自分を無理に引き戻そうとしながら —— ほんやりとなだめるように) 馬鹿なこと言って。(また先ほどの

状態に戻って夢見るように微笑む）あのね、今朝、母さんと話していて、それまで思い出さなかったことを突然思い出したんだ。大したことじゃないんだ。でも、すごいのはね、僕がまだ一歳にもならない時の事だって、母さんが言うんだ。大した事じゃない、今も言ったようにね。でも、昔の事をそんなにはっきり思い出すことができ、幸せで力が湧いてくるのを感じられたんだ。

セアラ （彼を見つめて —— 怯えと憤りで）サイモン、目を覚まして！ あなたは私といるのよ！（サイモンに激しくキスをする）私のところへ戻って来て！ 愛してるわ。私はあなたの妻、あなたは私のもの。愛してるって言って。

サイモン （完全に目を覚ます。表情が変わり、セアラの体を引き寄せて抱き、情熱を込めてキスする）愛しい女ひと！ 何よりも君が欲しいって知ってるよね！

セアラ （突然嫌悪感に駆られ、サイモンを突き離して身を引く）いやよ！ 私が欲しいのは愛なの ——（そして、無理に笑って、再度サイモンの腕の中に身を投げる）でも、あなたが私のものなら、何だってかまいやしない！

サイモン 僕の美しい愛人！（セアラをソファの方へ連れて行こうとする）

セアラ （彼から逃げて、じらすように笑う）いえ、だめよ！ その前にしなければならぬ仕事がたくさんあるでしょ。まず私を稼ぎ取らなきゃね！

サイモン 今度は何を払って欲しいんだい？ 僕の持ってるものはもう殆ど全部手に入れたじゃないか。

セアラ 私達が手に入れた銀行があるじゃない。

サイモン （笑いながら）ああ、そのことか！ 書類は作らせてあるよ。だが、君の所有にするための署名はもちろんまだだけど。ま

ずその前に ——

セアラ でも、署名しないかも知れないでしょう。私には分からないじゃない。まずその前にですって —— ?

サイモン (自分の方へセアラを引き寄せようとする) ねえ、今ではもう分かってるだろ? 君にどれだけの価値と値打ちがあるかを証明するんだ、君に対してもね —— 僕自身に対しても —— それが僕の最高の喜びなんだ。

セアラ (媚びるように) だめ、言ったでしょ、後で。(じらすようにサイモンにキスをする) さあ、これが契約締結のためのキス。

サイモン だけど、僕は今日、工場にひとつ走りしてこなければ。賃金引き下げに不満が出て、従業員達が代表を送って来るんだ。

セアラ 首にするのよ! 代わりならいくらでもいるわ。

サイモン その通りだね。だが、先ほどの契約だが。君は後でって言ったけど、僕は午後遅くにしか帰ってこれないんだ。夕方お袋を訪ねる時間にやっと間に合うくらいにしか、だから ——

セアラ (激しく支配的に) だから、彼女のことなんか忘れて、私のことだけを覚えていて!

サイモン (躍起になって反論する) でも、約束したんだ ——

セアラ 今朝も遅かったじゃない。彼女に会っていて。わざとなのよ! あなた、彼女のための言い訳なんかいやよ。

サイモン (事務的に強い口調で) さんざん説明したじゃないか。お袋のご機嫌取りは、お袋のためというより僕達のためなんだ。それに、誰かがご機嫌取ってれば、孤立させ過ぎて気まぐれな幻想に耽ったりさせずにすむ ——

セアラ だからこの前言ったでしょ? 私また喜んで子供達にお相手させますって ——

サイモン 無意味だね。僕ならそんな事お袋にさせないよ —— それにお袋はもう君の子供達を望んでいないよ。なぜって、今では

もうちゃんと僕がいて ——（突然話題を変え、鋭く権威ある経営者の態度で自分の机に行く）さあ、遅れた時間分を取り戻さなくては。テナードが来てるんだろ？ ジョウエルに通すように言いなさい。

セアラ （有能で忠実な秘書の態度で）かしこまりました。（右手のドアを開け、首を隣りの部屋の中に入れてジョウエルに話しかける。サイモンの向かい側の机に戻って、指示を待つ）

サイモン 汽車の時間までに、テナードの方を片付けることにしよう。君は屋敷の図面の仕事に戻ってよろしい。（セアラ、右手後方の机に引き返す。サイモン、図面を一瞥して —— 侮蔑を底に含んで）銀行も、もうすぐ君のものになるんだから、まだまだいっぱい付け加えても金銭的には大丈夫だ。きっと夢の中ではもっと考えてあるんだろうね。

セアラ ええ、その通りよ。いつだってもっと考えられるわ！ ああ、なんて素晴らしい人生かしら！ この世で何の心配もなく、心安らかに寛いで、息子達が成長して立派で裕福な名士になるのを見守り、私を愛することだけしか考えてない夫であり愛人がいつもそばにいてくれるなんて！

サイモン （彼女の背を見詰める —— 苦々しく痛ましいほどの悲しみに加えて、嘲けりと皮肉を込め、静かな声で）ホームズ博士の書いた詩がある。君もそのうちに読めばいい —— もっと素晴らしい創造力が持てるよ。

（「おうむ貝」から引用する）

「おお、わが魂よ！ 更に大いなる館を建てよ
季節は素早く巡り来たれば！
過去の低き丸天井は捨てよ！

新しき^{やしう}神殿はいずれも^{まえ}以前にもまして気高く、
より広大なる丸天井で汝を天より閉ざし、
ついには自由の身とならん。
小さくなりし殻を捨て去りて ——」

(声を止める —— やがて自分の内面を凝視しながら、声に出して一人呟く。かたやセアラはうっとり、夢みるような目で図面を見詰め続ける)

君は入口の上の壁に、必ずこの詩を刻みつけるだろうし、お袋は、あずまやの魔法の扉の上にあだ。そして、僕は会社の部屋の天井に —— 金文字で！

(後方、ドアをノックする音)

セアラ (再び有能な秘書の態度に変わる) きっとテナードさんです。お通ししましょうか。

サイモン (奇妙な計算高い満足が表情に浮かぶ) いや。ちょっとした考えが浮かんだった。破産した物乞いにふさわしく、テナードをしばらくドアの外で待たせてやろう。(椅子から立ち上る) ここに来て僕の席に座るんだ。僕に何が起こっても、君がこの会社の運命を充分左右できるということを証明させて欲しいんだ。

セアラ 一体、あなたに何が起こるっていうの？

サイモン 誰にも分かりゃあしないよ。人間はみんな死ぬんだから。

セアラ そんなこと言わないで、あなた。

サイモン それなら単に去っていただけさ —— 必要な長い休息を切望して。

- セアラ （怯えながらも、嫉妬の籠った怒りに燃え） ああ、誰がそんな事をあなたに吹き込んだのか、分かっているわ！ あなたを連れ去るためなら、もう何でもやりかねないってこともね！
- サイモン とにかく、君は会社を買い取ったんだから ——
- セアラ （怯えたように） あなた、私から去って行くの —— （荒っぽい口調で自信たっぷり） したいようにしてみれば。だって私はあなたも買い取ったんだもの。

（再びドアをノックする音。だが二人共気に留めない）

- サイモン ああ、分かっているよ —— 君のものになることが僕の一番の幸せなんだ —— 自分から逃れて、君の中で溺れて我を忘れるのが —— そのためなら何でも払うよ！
- セアラ （優しく笑って） それでこそ私のサイモンだわ！ そんな風に話して欲しいの —— 人生や愛について —— 死ぬなんて話じゃなく ——
- サイモン （彼女に向かって駆け寄ろうとする） 愛しい女^{ひと}！

（再度激しく耐えがたいようなノックの音。サイモン、やっとセアラから目を離す）

どうやら、わが友テナードは、もう充分不安と屈辱を味わったようだ。ここへ座って、セアラ。君ならきっと、あいつに身の程をすぐに思い知らせてやることができると思うよ。

- セアラ （机のところへ来る —— 満足そうな笑顔を浮かべてサイモンの椅子に掛ける） でもサイモン、あなたがなぜあの人を来させたのか、私はそれも知らないのよ。私達があの人を破産

させたんじゃないの。こちらの欲しいものなんか、何ひとつ残ってはいない筈でしょ？

サイモン いや、ある。あいつならまだ二、三年は使えるよ。有能な銀行家だし、まだ我々の役に立つ。そりゃあ今のままじゃあ無理だろう。あまりにも古くさい道義やら名誉を重んじ過ぎているからね。もっとも、だからこそ、簡単に破産させられたんだけどね。できれば、あいつの弱みを見つけ出して、容赦なくそれを利用するんだ。あいつの現状についてはそこにくつつかメモしておいたから分かるだろう。あとは、有能なる君の手に任せるさ。我が麗しの君。(笑いながら彼女の側を離れ、右手後方の彼女の机に行く。その時、再び、ドンドンとドアを叩く音。素っ気なく言う) どうぞ！

(ドアが開き、ベンジャミン・テナード登場。背が高く厚い胸をした六十代の男性で、ローマ系の堂々とした顔立ち。洋服は保守的で高級品。事業に成功して長年の生活で身に付けた富裕な人間の持つ雰囲気や威風凛々を依然として持っている。衰れにも、この外見によって、一目で分かるほどの打ちひしがれている内面の様子が一層露わになる。入って来た時の彼の顔は、自尊心を傷つけられて紅潮している)

テナード ハーフォード君！ 君の方から僕に約束したんだよ。僕が君にじゃない！ それで、向こうの部屋で、さんざん待たされたうえに、今度はノックしても、ノックしても、長々と待たされて。まるで——！

セアラ (遮って —— 詫びる気配もなく) お待たせして申し訳ありませんでしたわ、テナードさん。(テナードは、セアラの存在に気付いていなかったために、驚き混乱して、振り向いて彼女を見詰める)

- テナード　こ、これはどうも失礼、奥さん、気が付かなくて——
- セアラ　（彼女の反対側の椅子を顎で示し）お掛けになりませんか？
- テナード　（不安そうに、サイモンを見やって）はあ、どうも——
- サイモン　（冷やかな愛想笑いを浮かべて）いいんだよ。君の約束というのは、本当は妻との約束なんだ。だから僕は失礼して——

（セアラの机の上にある図面に向かって頷いてから、テナードに背を向けて座る。テナード、セアラの反対側の椅子に座る）

- セアラ　（メモをちらっと見てから）テナードさん、どうやら、私があなたにお会いしたかったのはなぜだろうと考えておられますね。私も、あなたが何故ここに来るのに同意なされたのか、ちょっと考えていたのですよ——こんな事情でいらっしやるのに。
- テナード　私の破産はお宅のご主人に責任があるのに、という意味ですか？
- セアラ　主人は私の同意なしには何一つしませんわ、テナードさん。あなたの銀行を乗っ取るには、あれが一番安上りな方法だと、私が考えたのです。
- テナード　ええ、あなたがご主人に助言されているという噂は聞いたことがあります。でも、まさか——（彼女の視線を避け、無理に笑顔を作り）恨んでなんかいませんよ。戦い、手段を選ばず、ですからね。多分やり口は、あまり道義にかなったものとは言えませんし——冷酷といってもいいくらいですが。もっときつい言葉で言っている者さえいます。
- セアラ　あなたが、私の欲しいものを持っていらした。私は強かったから、それを取り上げたのです。私は強いから正しくて、あ

あなたは弱いから悪い、という訳です。

テナード それは何とも恥知らずな信念です！（それから殆んどへつらわんばかりに）こ、これはどうも失礼しました。おっしゃる通りかもしれません。新しい時代には、新しい習慣——そして、新しいやり方。（無理に作り笑いをして）私は、毫碌した犬ですから、新しく変わった時代での策略は覚えられないですよ。

セアラ 覚えられるようにと願っていますわ。テナードさん——御自分のために。

テナード え？ 何のことやら分かりませんが——（性格の良い潔い敗者を急いで無理に装って）でも、先程も申しましたように、私は気持ちを害したりしていません。だからこそ、こちらへお伺いしたわけで——

セアラ あなたがおいでになった本当の理由は分かっていますわ。あなたには一銭もない。でも年配のお母さんに奥さん、それに未亡人の娘さんが二人の子持ち。あちこちの銀行に職を求めて問い合わせをなされたけど、あなたは年配過ぎる。それに先頃失敗したため悪い評判が立って、皆さん、あなたに対して偏見があるのですからね。一つか二つ、二流事務職員の仕事はありましたけどね——物乞いに小銭を投げて恵んでくれるようなのなら。

テナード そうなんですよ、あいつらめ！ 忌々しい。でも私は——

セアラ その上、そんな給料では、とても家族を養っていきません。屈辱的な貧乏に甘んじる以外には。あなたは、お母さんや奥さん、娘さんが、あなたの不甲斐なさをなじるようになりはしないかと不安になられた。

テナード （魅入られたように彼女を見詰め、苦悶に駆られてどっと喋り出す）そんなことにでもなれば最悪です！ そんな感情を

家族が隠してると思うと—— 憐みから。

セアラ　ところが、最後に一つだけ窮余の策があったのですね。私があなたから取り上げた銀行を取り仕切る人をまだ誰にも決めていないという事をお聞きになった。それで、見込みはないかも知れないけれど、一縷の希望を抱いて、私があなただを呼んだ理由とは——（間—— 冷ややかだが愛想良く微笑んで）そういう理由で来て頂いたと言えて、私も嬉しいですよ。テナードさん、あなたにその仕事をして頂きましょう。

テナード　（安堵と感謝とで、張りつめた気持がゆるみ）な、何とお礼を申し上げればよろしいのか—— 奥さんのことを誤解したりして申し訳ありません—— もちろん、その仕事は喜んでお受け致します。

セアラ　ちょっと待って！ それには条件があります。でも、その条件をお話する前に申しますが、あなたからの感謝の気持ちなどは全然必要ありません。あなたやあなたの家族に何が起ころうと、当然ながら私には何の関心もないのですから。私は自分のものにしか関心はありません。

テナード　あなたは—— 残酷なほど率直でいらっしゃる。それで、条件とはどのような？

セアラ　あなたの自尊心が恐らくそれを拒絶せざるを得ないのではないかと、まず警告しておきますけど。条件というのはつまり、いかなる命令にも服従すると同意頂くこと。機械的に、即座に、また絶対的に服従すること。あたかもうちの工場が一番下っぱ職人のようにですよ。

テナード　（屈辱を受けながらも、無理に理性的な口調で）信頼して頂いて結構です。私も銀行業界ではトップに立っていた者です。迅速な服従が望ましいことは承知しております。

セアラ　私が差し上げる給料なら、あなたの家族がほどほどに快適に

暮らせるでしょう。そうしたら、少くともある程度、今まで通り、家族の方々の愛や尊敬を買い取り続けることはできるでしょう。

テナード (混乱して言葉に詰る) そ——それは本当に感謝致し——

セアラ 私がこのように申し上げるのは、今後あらゆる誤解を避けるために。また承諾なさる前に、私の申し出に対して払うべき対価を直視して頂きたいからです。

テナード 分かりました。でも、ご心配なさる必要は——私には選択の余地はありません。お受け致します。

セアラ 私のやり方で起こった最近のご経験からお分かりかと思いますが、あらゆる罪悪感を忘れて頂かねばなりません。誇り高いあなたには、明らかに詐欺なり窃盗だと思えることも、必要とあらば、忠実に行なわねばならないということですが。自覚しながら詐欺師なり盗人になりでも積極的になれるか？

テナード (ついに良識の従順さも失うほど屈辱を受けて) 私は——奥さん、あなたは気でも狂ってるに違いない——そんなことがよくも！——でもご婦人に返事はできかねます——きっとご主人がこんな——(パッと立ち上がり、サイモンに向かって憤怒に駆られ) とんでもない方だ！私があなたの程度まで墮ちたとでも思っているんですか？それくらいなら、犬のようにどぶでも餓え死にした方が余程ました！これが、君の恥知らずな申し出に対する私の答えです。

(サイモンは振り向きもせず、彼の話の聞いている素振りも見せない。

テナード、ドアの取っ手を握る)

セアラ (突然堰を切ったように——会社勤務にふさわしい態度を一切忘れ、アイルランド訛りになって) まあ！一体何て男

なんだ！ 女、子供を愛してるなんて恰好だけ付けて、自分と一緒にどぶに引きずり落とそうってつもりなの！

テナード 嘘だ！ 家族は決して私にそんなことは ——（突然内面が崩壊したかのようなのである。麻痺して盲従するように頷く。虚ろな笑みを無理に浮かべて）そうです、全く自分勝手でした —— 自分のことだけなど考えているような余裕はありませんでした。奥さん、おかげで私の義務を思い出せましてありがとうございます。銀行経営の主義と要点は分かったと申しましょう —— ただ、実務上の視点だけですが —— ビジネスはビジネス ——（無理に息詰まるような含み笑いをする）古い諺にありました —— 棍棒や石は —— そう貧乏もだ —— 破壊するが —— 罵詈雑言では傷つかないと。泥棒呼ばわりしたい奴にはさせておくんだ！ 奥さん、その仕事を引き受けます —— 改めて —— お礼を申し上げます —— あなたの —— お慈悲に！

（テナード、ドアをぐいとひっぱって開け、ホールにとび出して、ドアをバタンと閉める。サイモン、椅子から降りてセアラのところへ行く）

サイモン よくやった！ 大したもんだ。

セアラ （顔色が変わっていく。両目に恐怖の色が浮かんでくる。無理矢理微笑を浮かべる —— 機械的に）褒めて下さって嬉しいわ。でもあれはあなたが —— あなたが私に望むようにしただけで ——

サイモン もう駄目だよ。今更上品ぶるのはやめて。あの最後のひと押しがとどめだったね。全部君の腕だ！ 僕が予想したのはね、あいつはいったんは出て行く。だがもう一度家族と向かい合ったら、やむなく帰ってくるだろうと。でも、君のやり

方の方がはるかに巧妙だったよ。(彼女の肩を軽く叩く)

セアラ

そうよ、最後のひとかけらもあの人のプライドを残してはやらなかったわ、そうでしょう？(突然、崩れ落ちる——すすり泣きながら) 神様、お許し下さい！(不意にサイモンに向かって——苦々しい怒りが湧き上がり) 私のせいじゃなかった！ あなたのせいよ！ 何をしがっているか分かりきってるわ。帰ったら、デボラと一緒に私のことを、本音では何て低劣で下品なあばずれだって嘲笑うんでしょう！(復讐心に燃えて)でも、そんな事はさせない！私、テナードのところへ行きます！今ならあの人、必死で復讐するでしょう！会社が本当はどんな状態か、ほのめかすだけでいいのよ。そうしたらあなたや会社はどうなる？一銭もなくなるわ！私は自由になって、子供達を連れてあの昔の農園に行って、まともに正直に、土の中で暮らしていくわ！(顔を両手で覆ってすすり泣きながら)こんなこと、もう続けてはいられない！もうやめるわ！

サイモン

さあさあ、セアラ。分かるよ。すさまじい緊張だったからね。(異様な緊張と興奮の様子で)もちろん、君が絶えず危険があると思うのはもっともなことだ——ちょっと小声で話したり、事実についてほのめかすだけで、噂が始まる。打ち負かされた大勢の敵どもの間でね。奴らには君を妬んだり憎んだりする然るべき理由があるからね——

セアラ

然るべき理由、憎むって、私を？

サイモン

そうさ、例えばの話、テナードが君を好いてるなんて想像できるかい？

セアラ

でも、それはあなたのせいで——

サイモン

だが危険については疑いようもない。まるで、奈落の上に張られた渡り綱を歩くようなものだ——

- セアラ　　そう、分かっているわ！ 私、気が狂いそう！ 心配で眠ることもできないわ！
- サイモン　でも下を見てはだめだ。そうしたら、混乱してしまって、身を捨て去りたい衝動に捕まってしまう —— 僕には分かっていると思わないかい？ 不安状態を終わらせ、どんな代償を払ってでも、忘却と平安を得たいという、そんな衝動にどれほど君が憧れているか —— 自分を滅ぼしてでも解放されたという衝動に！
- セアラ　　あなた！ そんなことやめて！ 私に考えさせないで ——
- サイモン　僕には充分分かっているんだ。君がどんなに、敵どもに本当のことをそっと喋って、現実にはこうだという噂を広めたいという誘惑に駆られているか —— 責任感と罪悪感という重荷を投げ捨てたいという誘惑に —— もうこれ以上続けなくてもいいという誘惑！ 静かになりたい。休息へと還りたい！（憧れで夢見のように前方を見詰める）
- セアラ　　（怯えて —— 彼の腕を掴む）あなた！ そんな見詰め方しないで！ そうしているとまるで —— 変よ、狂ったみたい —— そんなあなた、怖い！
- サイモン　僕が？ そうならないように気を付けてと言っただけだ！ 君は弱くはいけない。もっとずっと続けていかなければ！
- セアラ　　いやよ。もうしたくない。ねえ、サイモン、もう銀行も手に入れたし、この辺で満足したら？ 利益を合算して借金を全部返してくれない？ デボラには年金をあげて引退して貰って、あの家をあげて一人で住んでもらいましょうよ。私は自分の館を作り、自分自身の家庭を持つわ。夫と子供達のためにね —— （サイモンに体を押し付ける）そして何よりも私の恋人のために。
- サイモン　（この最後の言葉を無視し —— 素っ気なく）銀行の争奪戦

では、君の財産だって破局点まできてしまったんだ。現金の
一ドルは、今の君にとっては百ドルの値打ちだ。だめだ。君
は続けなくては。

セアラ (取り乱して) いや! できない! 私、もう限界なの!

サイモン 君はまだこれから小売店を作らなきゃあ。君が作る綿製品を
売るんだ——君自身の奴隷が働いている君自身の大農場
——君自身の奴隷船、君自身のアフリカ奴隷商人達。それ
で鎖の環の片側が完成するんだ。鎖のもう片側の最後の環は
小売り店だ——言うまでもないが、最高の仕上げをするに
は、大衆がどうしても君の綿製品を買うように、君のだけ
を買うようになるような策略を僕が考え付けければ——君は消
費者までも君自身の奴隷にできる。そうすれば、復讐と共に
環を完成できることになるだろう! そうすれば、君は自分
の人生を支配下における。今君が僕を支配下に置いているよ
うに! (笑う。目は欲望に光り、セアラを抱き締める)

セアラ (顔が輝く——笑いながら) そうなれば満足できるわ。で
は、そのための方法を見つけてね! いつも私言ってるわよ
ね? 心から望んでいる物は何でも、人生から奪いとる力と
強さがあなたにはあるのよ!

サイモン いつまでも励ましてくれる愛人がいながら、どうして弱気に
なんかなれるものか? 君が僕のことを誇りに思ってくれな
ければ、僕は自尊心も持てないんだ。

セアラ ええ、誇りに思ってるわ! 女性がこれまで持ったことがな
いほど偉大で強い恋人が、私にはいてくれるって! (サイモ
ンに熱烈なキスをする) あなた!

サイモン (突然、事務的な口調で) さあ、これで片付いた。(時計をち
らっと見る) さて汽車に乗りに行かないと。(ドアの方へ行
きかける。セアラ、彼の行く手を塞ぐ)

- セアラ キスもしないで私をおいていくの？ あなたの望む通りにしてるのに？ 構わないわ！ 残酷にされてもいいわ！ 私なんてあなたに足蹴にされている土くれみたいなものよ。それを誇りにまで思って！ 娼婦になって欲しいならなるわ。身も心もそうなる。あなたが私のものでありさえすれば！（サイモンに激しくキスをする）あなたが欲しいの！ 今放つていかれるなんて耐えられない！ でもここへ帰って来るわよね！ 待ってるわね。思い焦がれて——
- サイモン （情熱的にキスする）よし！ 誓って約束するよ！ 何があっても必ず——
- セアラ 今朝みたいに私のこと忘れてたりしないでね。デボラのこと忘れて、待たせておくって約束したのよ。忘れないでね。
- サイモン 臆病者の年寄り魔女は、最後の審判の日まで待たせておくさ！ 自業自得だよ。あんなに闇が怖いくせに、たった一人で、化け物屋敷みたいなあずまやを、あんなに馬鹿らしくらい迷信がかかるほど恐れて！（急に言葉を切る。顔は激しい怒りの表情に変わる）どういうつもりなんだい？ お袋のことは忘れていたのに！ なぜ思い出させるんだ？ ここで君の腕の中にいる時でさえ、お袋から自由になれないのかい？ 愛人一人持つために、こんな法外な代価を払うのは、何のためだと思う？ お互いのゲームをするために、お袋と秘密の取り引きでもしたのかい？ お袋も、あの庭では君のことも長くは忘れさせてくれない。君に嫉妬してるような振りをするんだ。君と全く同じように——でも僕には分かっている。君は僕をもっと憎んでいる。僕を排除しようと決めたんだ！ だが、君はその筋書きを進めない方がいい。なぜって、警告しておくけど——僕の方こそ——（自分を抑える。目は荒々しい威嚇で光っている）

セアラ (彼を見詰める —— 恐怖で動揺に) サイモン! そんな顔しないで! 一体どうしたの? (突然憤然として自分に腹を立て) 哀れで愚かな人だこと! デボラのためにデボラのゲームをする? 私の望みは、私のものを盗み取ることがないように、二度と戻って来れない所に永久にデボラを追っ払うことよ ——

サイモン (冷ややかに打算的な嘲りを込めて) 君は、お袋の陰では偉そうに言うけど、一緒の時には怖がっているじゃあないか!

セアラ 私が怖がるって、あんな哀れで年寄りの ——!

サイモン 君の偉そうな言葉を信じよう、セアラ。君が証明してくれたらね。僕を自分のものにしたいのなら勇気をもって —— (異様なひどい憎しみを突然爆発させて) 僕達の間にお袋を永久に入り込ませておくのかい? あの忌々しい業突く張り婆さんを僕達の人生から追い払うことはできないのか?

セアラ (恐ろしそうに彼を見詰める —— だが夢中に熱心に囁く) つまり、私にそうしろって ——?

サイモン (恋人らしい陽気なからかいの調子に変わり —— 彼女の頬を軽く叩いて) 何でも君の心が人生で望むことならやって欲しい。僕を君のものにするために。それを証明するぐらいの分は、既に充分払ってる筈だ! (笑ってセアラにキスをする) さあ、汽車に乗らなくては。午後までさようなら。

(サイモン、後方から退場。セアラ、立ったまま彼を見送る。熱心だが恐怖も混じった表情を顔に浮かべている)

第三幕 第二場

場面

第二幕第二場と同じ。あずまやのあるデボラの庭の片隅。同日午後九時頃。満月だが、雲が絶えずかすめ過ぎて行くために、気味悪い灰色の光となり、そこでは全ての物体がぼんやりとして、輪郭が互いに混じり合っている。断続的に僅かに差し込む月光が非常に鮮やかなために、幾何学的に刈り込まれた低木それぞれと、その影とが鋭い形を見せる。射したり陰ったりする月の光は、庭そのものが持つ強烈で沈鬱な雰囲気にも似ている。いくなれば子供用に作られたおもちゃの庭が、否応なく拡大されて、人工的に歪められたという雰囲気。それがこれまで以上に強烈に誇張されている。

デボラ、あずまやの前にある池と、右手の通りに通じるドアとの間の小道を行きつ戻りつしている。神経が完全に崩壊しないように、荒れ狂うような泣き方をしないようにと闘っているような様子。反面、彼女は同時に激烈な怒りに捕われて、その目は苦々しい嫉妬ゆえの憎悪で燃えたぎっている。

肉体的にも変化が目立つ。小柄で少女のような姿はひどくやつれている。人体を持たない魔女のようで、小さく痩せ衰えて年老いた印象。お伽話から魔法で蘇った不吉な妖女の如くである。小さめで華奢な卵形をした顔は無数の皺で覆われ、憔悴しきっている。余りにも蒼白い顔は、血が通っていないデスマスクとなり、大きな黒い目は暗い穴から見詰めているようである。

いつも通りの白づくめの服装。周到にもなまめかしく妖艶に飾り立てよ

うとした様子が痛ましくも明白に窺われる。美しい白髪を巻いて結い上げているために、十八世紀の流儀にも似ている。しなびた唇に口紅を塗り、紅をさした両頬にはそれぞれにつけぼくろを付けている。過ぎ去りし時代の肖像画から戻って来て、遠い昔の逢い引きの場所に取り憑こうとしているかのような様子。

デボラ ああ、一体どれだけ長くこうして待ち続けたことかしら —— 何時間もだわ！ —— 夕食前に何時間も —— 子供達にじっと見られて —— あの子達、好奇心でいっぱい目のしてせせら笑って —— 馬鹿にしながら笑って —— でも怖がってもある —— セアラから言われたのね —— 私に気をつけるように、ちょっと狂ってるからって —— それから、夕食の後にもここに来て —— また待っている —— なぜ私が待たなければならないの？ —— (突然言葉を切って、緊張して懸命に耳を澄ます。駆け出して行き、右手壁のドアを開けて外の通りを見る —— ドアを閉める —— 物憂げに) もう誰一人として —— 多分人生以外には、再び去って行くものなどいないのに —— 何回も走って行ってドアを開けて、毎回一抹の望みを持って —— ? サイモンたらよくもこんなに私を侮辱して！ サイモン、用心するがいい。私がこの侮辱に報復なしに耐えると思っているなら！ だめ、いけない。あの子を責めてはいけない —— 工場で足止めされているんだわ —— 私は愛されているのだから —— 唯一私に残された希望は、サイモンがここに訪ねてくれることだけ。あの子にはよく分かっている。でも、サイモンが工場で足止めされていたとしても、セアラまでも帰宅しない説明にはならない —— きっとセアラと一緒にいるのね —— あの子は今でさえ、あのあばずれに抱かれ、一緒に笑って、私が無益に待ち続けているのを哀れな見世物のように思って！ ——

ああ、何故セアラはこんなにひどく憎ませるようにさせるのかしら——セアラが企んでいることはよくよく承知——私を厄介払いしようと——間違いにさせようと——私をわざと駆り立てる！——私が出て行けばいいのになって願っている。もちろん私一人きりで——（嘲るように笑う）いいえ、そうはいかないわ、セアラ。その時には私、自分のものは一緒に連れて行くから！（デボラが語っている間に、月が雲の背後から現れ出て、あずまやのドアをはっきりと照らす。言葉を止め、魅惑されたようにそのドアを見詰める——それから恐怖におのきながら急いで背を向ける）だめよ！ できない！——必要もない——セアラを娼婦にするようにって突き付けたのは私——今ではもう、セアラが汚らわしい下品な女だとサイモンにも分かっている——もうすぐサイモンはセアラを蛇蝎の如く嫌ってこの家から追い出すわ——そして一方——（顔は柔らかく恍惚とした夢見がちな表情になっている——勝ち誇って）私の愛する息子と私——もう一度一体となって——その後幸せに暮らしました、という結果になるのよ。（彼女の目が再びあずまやのドアに釘付けになる。突然怯え、向きを変えて不安そうに庭を見詰める）あの子が来てさえくれれば！この庭に夜一人きりでいるのは怖いわ——異様な雰囲気——陰鬱で脅かされる——そして私の本性には、何かそれに反応するものがある——（言葉を止める——だんだんと苦痛と猜疑心が募っていく）サイモンを過去へと戻したのは私だなんて、何故自分に嘘をつくようなこと、言うのかしら。あの子の邪な復讐の企みを無理やり実行させられたのは、実際は私自身だと分かっているのに——？ だめよ！——私ったら何故こんなに間違いじみた猜疑心を持てるの？ 喜ばなければいけないのに——だってあの子がどれほど私を愛しているかの証明

だもの —— どんなに私の愛を必要としているか —— (再び猜疑心で —— 自らを侮って) 愛ですって? あの子には愛なんてもう不可能だって分かっているじゃない —— 今ではあの子が持てる感情は情欲だけ —— それから、セアラに吹き込まれた私への憎しみと —— 二人でぐるになって私をどんどん内面の奥深くに追い込もうとする陰謀 —— 私を罠にかけて、ついにはあのドアを開けさせる。あの子の手を取って —— でも、最後の土壇場で、サイモンは自分の手を振りほどき、私一人きりの中を押し込む。私が昔そこに閉じ込めたあの狂ったデボラ自身の幻と一緒にるように —— (月が再び雲の背後から姿を現し、あずまやを明るく照らす。怖ろしそうに小さく叫ぶ) それからはもう当たり前、私を精神病院に監禁するのめいとも簡単という訳ね —— でも、サイモン、気を付けなさいよ! 私の方が自分の手を振りほどいて、あなたを狂ったデボラの幻と二人きりであそこに残してやる。そこにいるデボラは容赦しない —— あなたは壁を叩いて、どんな代償を払ってもいいから出してと叫ぶのよ! (急に言葉を切って、苦しそうに両手で頭を押さえこむ) ああ、助けて! 考えるのをやめないと —— こんなままだと、自分以外誰も手を下す必要はなくなる —— 自分で自分をあそこに追い込んでしまう! (行きつ戻りつする) サイモンは引き止められているのよ —— 辛抱強くならなければ —— 時間を潰す方法を見つけて —— 思い出すわ。あの日の午後。あの小屋であの子を待っていた時、夢を見て楽しく時間を過ごせた —— 目を開けたらあの子がいたわ —— (池の右後方にある石のベンチに腰掛け、目を閉じる。意志を集中させるに従って顔に緊張が見られるが、意図的に自己催眠をかけて忘我状態に入っていく。ゆっくりと弛緩して、夢見心地に呟く) マルメゾンの庭 —— あずまやがある —— 皇帝陛

下が ——（夢想が乱されるが半ばしか目覚めない）だめ ——
こんなのはいや —— ベルサイユも王様もいや —— ナポレオン
皇帝？ ナポレオンは大嫌いだと思っていたじゃない ——
父が愚かしくもナポレオンと神を混同していたから —— サイ
モンだって自分がまるでナポレオンみたいに ——（幸せそう
に夢に沈んでゆく）皇帝陛下は口づけなさる —— 「我が玉座、
そは汝が心。愛しき者よ、余は ——」

（デボラがこのセリフの最後部分を言っている間に、セアラが足音を
忍ばせて左手にある家からの小道を歩いて登場。放埒に疲れ果て、目
の下には隈ができています。満足気に、また残忍で嘲笑的にデボラを横
目で眺めて立っている。夢に浸っているデボラの顔がぱっと明るく
輝く）

やっといらして下さいましたのね、陛下。私がお待ち申してい
ることをお忘れになられたのではと、私の心は哀れにも怖れて
おりました。（立ち上がりながら、蠱惑的にそっと笑う）私に
お手を。そして二人で中に参りましょう、陛下 —— 私達の愛
の神殿に。そこには美と忘却しかございませんわ！（手を差し
出し、夢の中の恋人である王の手を握り締め、あずまやのドア
の方に向きを変えて、ゆっくりと階段を登り始める）鍵はここ
にありますよ、陛下。このところ、ずっと胸に付けています
の。（胴着の中に手を入れて、首から掛けた紐に繋いだ鍵を引
き出す —— 怯えて躊躇う —— それから鍵を開けるがドアは
開けない）私 —— 私、正直申し上げますと、少し怖いのです、
陛下。ああ、どうか、もう一度お誓い下さいまし。私を欺きは
なさらないと —— 愛と忘却の神殿なのだと！

セアラ （自分と闘いながら）あの人、分かっているんだわ。夢の中で

さえも！

デボラ (強いて決然とした歓喜に満ちた口調で) でも、例えそこが地獄であっても、陛下の愛で私には天国ともなりましょう！ (ドアの取っ手に手をかける)

セアラ そうよ、地獄に堕ちて呪われたらいいのよ。そうしたら、サイモンは私だけのものになる！ (だが、デボラが取っ手を回そうとするとすぐにデボラの方に飛び出して行く) やめて！ ドアから手を放して。馬鹿なことをして！

(デボラ、びくっとして、当惑した叫びをあげて半ば目覚め、ドアにかけた手を引っ込め、茫然と震えながら立ち尽くす。セアラはデボラの両肩を掴み、彼女を手荒く揺さぶる)

狂った夢から覚めるのよ、ほら！

デボラ (子供のようにすすり泣きながら) 放して！ 痛いじゃない！ 不公平よ！ 私よりずっと力が強いくせに！ サイモン！ 私をほっとくように言って！

(セアラ、デボラを放す。デボラはセアラを見詰める。今では完全に夢想から覚めている。挫けながらもいつものように尊大に、背筋を伸ばして立とうと努力する)

あなたなの！ よくも私に触ったりして！

セアラ 痛かったらごめんなさい。でも、どうしても夢から覚めてもらわなければと思って――

デボラ まあ、誰かに打たれるといい！ その太った白い肩に血が流れるまで鞭打たれて！

セアラ 止めてあげたお礼がそれだって訳ね！

- デボラ よくも厚かましくここに来れたものね！
- セアラ そのお上品ぶった態度にはもううんざり！ 伺いたいわね、この庭は誰の財産なの？ ここにはあなたの権利などゼロよ！
- デボラ まあ！
- セアラ 同情したから来てあげたのよ。ここで一晩中だって馬鹿みたいに待ち続けるだろうって分かっていたから。サイモンは私と一緒に帰って来て、あなたのことなんか一切忘れてるって教えてあげなければね。
- デボラ じゃあ —— 本当なのね —— あの子は確かに会社に戻って、ここには来ないで —— あなたがそうさせたせいね、その汚らわしい ——
- セアラ （嘲笑って）させた？ 例え私が離れてって望んだとしても、サイモンは私から離れられないのよ！
- デボラ そんなことを言うために来たのね —— 満足して悦に入るために！ この俗悪で下品なあばずれ女！
- セアラ まだ言うことがあるわ。彼がこの庭を訪れるのはもう終わったの。二度と来ません。私の腕に抱かれ、名誉に賭けて誓ったのだから！
- デボラ 嘘よ！ あの子は来るわ！
- セアラ もう二度と来ないって言ってるでしょう！ 夢も期待も捨てるのね！ 私が汚らわしい娼婦ですって？ ええ、私はサイモンが望むものになっているのよ！ そう言う自分はさっきの狂った夢の中で何だったかしら ——？
- デボラ （階段の下まで後ずさりしながら —— 後ろめたく）違う、違うわ！ ただ愚かしい空想をしてただけよ —— 時間を潰すために ——
- セアラ 私は騙されない。以前はフランスのルイ王だった。でも今ではナポレオン皇帝。お気の毒に！ とどまるところなしてて訳

ね。次はロシア皇帝にでもなるのかしら！

デボラ (階段の最上部まで後ずさりして —— 取り乱して) やめて！
やめてよ！ ほっといてよ！

セアラ (デボラを追って) 王様達が一夜の契りを下さいと乞い願うって訳ね。狂った夢から覚めたら、ちっぽけでしおれた老婆でしかないくせに。通りを行き交うつまらない男達でさえ見向きもしない。なのに、男達が実際に求めていた頃には、男達を求める強さもなく、庭に走り込んで隠れていたのよ。

デボラ (口ごもりながら、哀れにヒステリックに笑いながら) その通りよ！ 何とも馬鹿げているでしょう？ 余りに下らなくてうんざりする。ひどい話よ！ お願い！ 私に現実を見せないで！ もう自分で耐えられない！ もう耐えたくない！ 自由になるのよ、どんな代償を払っても！ 私は —— (向きを変えてドアの取っ手を掴む)

セアラ (本能的に彼女を掴み、ドアから引き離す —— 罪悪感の混じった恐怖を荒々しい怒りで覆って) そこからどくのよ！

デボラ いや！ 行かせて！

セアラ 行くの？ 行きたいの？ (デボラに何の重さもないかのように力強い両腕で軽々とデボラを抱え上げる。右手ベンチの前に降ろし、ベンチに無理やり座らせる) そこに座って落ち着くのよ！ そんな気違い沙汰で私の良心を咎めさせようと思っても、大間違いよ！

(デボラ、よろよろと立ち上がるが、顔を伏せて横向きにベンチに倒れ、わっとヒステリックにすすり泣き始める)

まあまあ、良かったこと。泣けるのだから。泣いたらいくらかでも正気に戻れるわね。(デボラの泣き声が次第に収まるにつ

れて、だんだんと説得する口調になってゆく）私が言ったのは本当のこと。サイモンは二度とあなたの所には来ないと誓ったの。工場から帰ってきた時に、私に払った代価の一部なのよ。サイモンは今は私のもの！ 持ってるものは全部私に支払ってしまった。もう私と私の愛情以外には何にも残ってないのよ。私は母親、妻、愛人と、一人で三役ってこと。サイモンはもうあなたを必要とはしていないのよ。

（デボラは静かになり、緊張して聴いているが、頭は上げない）

私がここに来た本当の理由は、あなたと筋を通して話したかったから。その狂った企みごとをやめると約束してくれたら、仲直りしてもいい。それに、子供達を返してあげるから、また一緒にいられるわ。そうすれば、以前のようにあなたも満足できるでしょう。私もあなたを憎まなくてすむ。私が憎むようにと無理やり仕向けてるって知っているわ。ご存知よね？（言葉を止める。デボラは黙ったままである。セアラの怒りが込み上がる）口ってものがないわけ？ 仲直りを頼まなければならないのは、私でなくてあなたの方なのよ！

デボラ （突然姿勢を正し、セアラを見詰める —— 嘲笑して）あなたって思ったよりもまだずっと愚かなのね。仲直りしてって頼むのは、あなたの勝利なんて空想でしかないから、どんなに危ないか告白しているようなものだわね？ 私が望めばいつ何時でもサイモンを連れ去ることが私にはできる。分かっているわよね！

セアラ （怯えて）つまり、サイモンを狂気へと連れ去る？ あなたと一緒に？ そんなことしようものなら、全能の神に誓って殺してやる。

デボラ (冷やかに、尊大に) そうしたら子供達の母親は絞首刑ってわけね？

セアラ 誰にも分からないようにやってみせる！

デボラ サイモンには分かるわ。母親殺しの妻を夫が愛するなんて思ってるの？

セアラ よくやってくれたって感謝されるわよ！

デボラ 嘘言って！ サイモンは私を愛しているのよ！ あなたは憎まれてるのよ。その汚らわしい体、満足しない貪欲さが大嫌いなものよ！

セアラ あなたこそ何てひどい嘘つき！ サイモンが愛してるのは私よ！

デボラ 私があのドアを開けるのを止めたわね。あの時止めなかったらあなた勝てたのよ。なのに優柔不断で感傷的だし憐み深いからね。結局いつも自分に負けるのよ。

セアラ この気違い婆あ。次には情けなどかけてやるものか！

デボラ (高慢に —— 召し使いに言うように) この庭はあなたなどには無縁です。ご自分の居るべき家に帰って、子供達の世界をなさったらいかが？ 私の息子は私と二人きりで会う機会を待っているのですから。

セアラ (怒って、左手奥の小道へと向きを変えながら) あの人は待っているとしたら、あなたがあそこに引き籠ったと聞きたくてだわ。そうしたら、精神病院に追っ払ってやる！

デボラ (痛ましく怯えた叫びを上げて) セアラ！ やめて！ (セアラに向かって夢中で走り出し、腕を掴む —— 恐怖で吃りながら) 行かないで！ ここに私一人置いて行かないで！ 私 —— 私怖い！ いてちょうだい！ な —— 何でもあなたの言う通りにするから！ 何でもあなたの望むよう約束するわ！ ただ —— 私をここに置いて行かないで！ (両腕をセアラに回し、

ヒステリックにすすり泣き始める）ああ、何故私にそんなに残酷になれるの？

セアラ （初めは疑い深くデボラを見詰めている —— それから勝ち誇って満足するが、意志に反して心を動かされる —— デボラが泣いていると最後には憐れんでしまい、子供に言うようになだめる）さあ、ほら、ね。怖がらないで。私には私達二人分の強さがあるじゃない。私達、もうお互いに滅ぼし合うのはやめましょうよ。子供達を返してあげるから。幸せにもなれて満足できるわ。さあ、一緒に家の中に入りましょう。夜気と夜露で冷え切って死んでなかったのが不思議なくらいだわ。さあ。

デボラ あなたってとても思いやりがあって親切なのね。

（セアラが左手奥に連れて行こうとする。デボラ、突然止まる —— 恐怖で）

だめよ。私達、サイモンが家の中にいることを忘れてるわ。私達、まだ弱過ぎて立ち向かえない。お互いに信頼し合ってここに一緒にいなければ。そうしたら以前持っていた力を取り戻せる —— サイモンの有害な嫉妬深い貪欲のために崩されて破壊されてしまったあの力を。そうよ、サイモンよ。サイモンなのよ。私達ではなくて。こんな状況に追い込まれてきた犠牲者は私達なのよ！

セアラ （憤慨して）ええ、どれだけ追い込まれてきたか、私にもよく分かるわ！

デボラ サイモンよ！ サイモン！ サイモンの仕業だわ。私達が死ぬまで決闘するように、あの子にまず駆り立てられたのよ！ 私達お互い誓い合ったじゃない。私達ではなくてあの子のせいだと常に覚えていましょうって。

- セアラ 分かってるわ！　なのに、あの人のせいで私達がお互いに騙し合って、憎んで企むように——
- デボラ 私達、どうしてこんなに何も見えてないくらい愚かになれたの！
- セアラ 私達、とても愛していたからよ！　あの人、それをよく分かっていて利用したのよ！
- デボラ 私達だって造作なくあの子に勝てたのに！　私達の方がよっぽど強くいられたのに！
- セアラ そうしたら、あの人も幸せになれて満たされていたのに！
- デボラ でも、それどころか、私達は昔捨て去った憎しみをもう一度呼び起こされてしまった。まるでサイモンが奈落に投げ込んだ二匹の狂った雌動物みたいに、お互いの心を引っ掻き合い、引き裂き合うようにされてしまった—— その一方でサイモンは離れて立って、貪欲な自尊心と共にその様子を眺めてせせら笑い、私達それぞれを駆り立てて——！
- セアラ そして一人だけが生き残っても、身も心も自分のものだと主張できるだけの強さはもはや二度と持てないって分かっているのよ！

(セアラが話している間、サイモンが両者に気付かれないように左手小道から二人の後方に現れ、二人を見詰めて立っている。恐ろしいほどの緊張状態にあり、目にはもの狂わしい表情。狡猾かつ脅迫的であるが、同時に途方に暮れ、狼狽した様子である)

- デボラ 形勢が逆転してあの子を負かしたらいい気味だわね、セアラ。私達、また一人の女として一緒になったのだから、力もある筈。
- セアラ つまり、サイモンを奈落に落とす？—— 自分自身ととことん闘わずために？

- デボラ 私達の愛を求めさせてね —— 一方で私達は女の誇りを満たされてあの子を眺めてやるのよ。笑って煽り立ててやるの！
- セアラ やがてついには ——
- デボラ そうよ、セアラ。やがてついには、あの子を追い払うのよ。まあ、考えてもみて。私達と子供達だけで、どれだけ満足できることか —— 祖母と母親、母親と娘、姉と妹、一人の女であり別の女でもある。私達の前には道がはっきりとある。人生の意味とはとても幸せで絶対的なもの。生きているって感覚は自ずから深く確かよ。考える必要もない。あらゆる苦しい疑惑も超えて。言いなりに「はい」と言っていれば、厳しい日々だって平安に前に進んでゆける！（言葉を切る —— それから幾分後ろめたく）あの子がここにいない方がいいって願う私が悪者だと思わないでね。
- セアラ 会社で何度もありましたわ。私も ——
- デボラ あの子が教えてくれたのよ。自分の中にあるものは何であれ良いもの —— 人間が欲するものは何であれ良いもの。一つ罪悪なのは自分を否定すること。私達は本来の私達でなく、あの子の思い通りに作られた姿！ だから彼の頭にあるのは ——
- サイモン （緊張しながらも何気なく）それは誤解ですよ。お母さん。

（二人共彼のほうに振り向く。ぎょっとして驚きと恐怖に喘ぎながら、防御するようにお互いにしがみ付く。それから、彼が前に進むに従って、二人は池の左手後方にあるベンチの端まで後ずさりする。池が二人とサイモンの間にある）

僕はただ、二人がありのままにと主張しただけです —— ありのままのあなた方でのいるのが一番良いのです。それが事実であり現実だから —— 下らないのは愚かしい理論の方。つまり、

人間は本来いわゆる美徳があり善良であると——違いますよ。現実には人間は利己的で貪欲なのです。全てはあの理想主義という欺瞞のなせる業なのです。我々の精神の混乱の全て、自己内部での葛藤、我々お互いの関わりでのいざこざ、特に家庭内での争い事の全て。そしてまた、本当は欲しくもないものを欲しがってみたい、心底欲しいのに不要だと自己抑制してみたり、そんな風に揺れ動かなければならないのは全てそのままやかしのせいですよ！ 極めて簡単に言えば、善は悪にもなり、悪は善にもなるということです。忘れてはなりません。

(聞いている間に二人の顔は頑なになり、甚だしい敵意を示す)

デボラ 聞いている？ セアラ？ 忘れちゃだめよ。

セアラ ええ、私達がありのままではなく、この人の望み通りになっているのはこの人のせいだもの。

サイモン (緊張を伴う平静さがプツンと切れ始める) でも、人間が持つ真の本性についての思想を議論するために僕はここに来たのではありません。(言葉を切り、突然激しく非難し始める) 僕——僕は、この問題の最終的解決をどうするべきかと集中して考える努力をしたんだ。最近どうしてもある結論に行き着いてしまうのです。それは、結局のところ、もし一人の人間の中で相争う二人の存在が余りにも互角であるなら——つまり、その人間自身が二人の間で引き裂かれる危険に巻き込まれる前に、二人のどちらにももう片方を破壊する充分な力がないのなら——それなら、自分を護るためには、最終的にどちらか一人を選ばなければならない、という結論で——

デボラ (ざくりとする——不安そうに彼を見詰めて) 選ぶ？

セアラ 選ぶって？

- サイモン 今では、それが唯一可能な手段だと思えるんです。この葛藤を終わらせ、正気を保つための。
- デボラ セアラ、あの子の告白を聞いた？ 私が思っていたよりずっとおしまいに近いわね。
- セアラ ええ、私達、待ってるだけでいいわ。そうしたらこの人から自由になれる。（軽蔑と憤慨を込めて）で、選ぶって訳ね。偉いじゃない？ 二人の奴隷のうちどちらを所有したいかって選ぶご主人様みたいね！ でも、奴隷が二人とも選ばせてくれなかったら？
- デボラ ただ、一緒に待つよ。離れて立って、自分を破壊するのを眺めていればいいのよ。（そっと笑う。セアラも共に笑う）
- サイモン （突然事務的な口調に変わって）一体何を話しておられるのやら、分かりませんね、お母さん。僕は、人間の持つ本性という抽象的問題について説明しようと試みているのです。なのに、二人とも、この問題に直接個人的に関わっているかのように話し始めたり！（冷淡に含み笑いをする）それって、女性の所有欲には飽くことない野望が伴うのだという、愉快な例ではありませんか？（素っ気なく）気になさらないで。あなた方相手にこんなことを話し合おうなんて僕が愚かだからですよ。あなた方が関心ある唯一の問題は何か知ってますよ。（怒りで興奮し始める）分からないのか。今夜のこと、僕が知らなかったとでも！ 書斎からここでの言い争いは聞こえていたさ。二人がお互いに引っ搔いて引き裂き合って。まるで酔っぱらった売春婦が二人って感じじゃないか。お互い罵り合って脅迫し合ったりして、大っぴらにスキャンダルを作りたいのか？
- デボラ 書斎からでは私達の声はとても聞こえやしなかった筈。あなたが聞いたのは自分自身の心の声よ。
- サイモン まるでここにいるようにはっきりと聞こえたさ！ 僕の人生に

はもう二度と一瞬たりとも平和はないみたいだった —— 二人がお互いに引っ掻き合って引き裂き合って、おぞましい決闘を続けていく —— やがては僕の心が切り裂かれてしまう！ 僕が狂いかけているってあてこすりたいのか？ 馬鹿々々しい！ 聞こえたって言ってるんだ。それからやっと静かになったと思ったら、それは恐怖の叫び声の後に来るあの静けさ。やがて分かるだろうと —— 心配したよ。もしかしたらここで二人のどちらかが ——

デボラ (サイモンを見詰めて —— 思わず身震いして) 私達も分かっていたわ —— あなたがずっと望んでいたのは ——

セアラ ああ、何ということ！

サイモン (荒々しく) そりゃあ、望んでいたかも知れない。そうだとしたら？ こんな暮らしに僕が耐えられると思うのかい？ 二人が殺人的な決闘を永久に続けているというのに —— 二人が憎しみ合うのに無防備なままで —— 引き裂き合っているあなた方の貪欲な爪で真っ二つに砕かれてしまうのか？ (突然挫けて池の左手にあるベンチに崩れるように倒れ込み、頭を発作的に両手で抱える —— 途切れ途切れに言う) なぜやめてくれないんだ？ 望まれれば何だってするよ！ 二人の心には愛も憐みも残ってないのか？ 二人で僕を狂気に追い込んでいってるのが分からないのか？

(精根尽きてすすり泣き始める —— 女性二人は一体となって、もう片方のベンチに共に座り、疲れ果てて無表情にサイモンを見詰めている)

デボラ (物憂げに) セアラ、私達、勝ったのね。

セアラ ええ、デボラ。負けたって認めてるもの。

（二人はサイモンを見詰める。突然二人の顔は一体となった顔のように、憐みと慈悲深い母性愛で震える）

デボラ　　かわいそうな子ね！ 私達、何故あんなに残酷になれたのかしら！

セアラ　　かわいそうなあなた！ 私達、何故あんな気持ちになれたのかしら！

（二人は一体となってぱっと立ち上がり、別々に、一人は池の片側を回って、もう一人は池のもう片側を回って、サイモンのそばに行く。サイモンの両側に跪き、片腕を彼に回し、急いで彼を慰め元気づける）

デボラ　　さあ、ほら！ 私達の愛しい息子！

セアラ　　私達の夫！ 私達の恋人！

デボラ　　泣いちゃあだめよ。ね。

セアラ　　もう怖がることなんて何にもないのよ。私達、許してあげたでしょう。

サイモン　（頭を上げる。どぎまぎして、夢を見ているようで不思議そうな平安が顔に浮かぶ——ほんやりと）うん、ここはとても安心だ。本当にありがとう。（セアラの方を向いて）愛してるよ、母さん。（デボラの方を向いて）愛してるよ、僕の——（後ろめたそうに言葉を切る——それから二人の腕から、ぱっと立ち上がる。取り乱して口ごもって）だめだよ、だめだ！ そんな見え透いたごまかしで僕をだませるって思ってるなら——

（女性二人はぱっと立ち上がる。二人が一体となって、「サイモン！」と叫び、両方が彼の片腕を掴んで、それにしがみ付く。サイモンは自分を抑えようと努力して身震いする。急に大人しく従順になって話す）

ごめんなさい。僕、まだ頭がすごくこんがらがっていて。思いもよらないショックだったんだ——ここには絶対入れない筈のセアラがいるのを見て——それから二人が仲直りするのが聞こえて——でも、それが僕の最大の願いなんだ——

セアラ あなた！（彼の腕を抱える）

デボラ 愛しい子！（彼の頬にキスする）

サイモン ありがとう、母さん。じゃあ、全部水に流して許してくれたんだね？　そういうこと？

デボラ ええ、そうですとも！　それに私達、あなたをととても幸せにしてあげる！　そうよね、セアラ？

セアラ ええ、私達、本当にそうするわ！　もちろんよ！

サイモン ちょっと一緒に座って休もう。醜い現実から隠されたこの庭で。

(皆が座ろうとした時、サイモンが突然声高に言う)

ああ、僕はなんて馬鹿なんだ！　セアラ、僕がここに来たのはね、子供たちが寝る時間で、お休みのキスを待ってるって言うためだったんだ。

セアラ まあ、かわいそうなことしたわね！

サイモン (狡猾に主張する) ハニーの面倒を良くみてやって。ちょっと熱っぽかったみたいだから。

セアラ まあ、かわいそうに！（左手の小道から去りかけて、躊躇って一緒に中に来るわね？

デボラ (素早く) ええ、もちろん——

サイモン ああ、かなり湿っぽいし、冷えるからね。中に行きましょう、お母さん。だが、セアラ、君が先に急いで行って、ハニーを見てやってくれないか。

セアラ　そうね、病気にならなければいいけど。じゃあ、私——

（急いで左手に退場。サイモン、振り返って母親を見詰める）

サイモン　（嘲るように含み笑いをする）さて、これで至極うまく追っ払えましたね。僕たちがここに残ってるなんてセアラは気付きませんよ。

デボラ　（硬くなって——冷ややかに）私はここに残ったりしないわ。

サイモン　（この言葉を無視して）おかげで二人きりになれましたね。

デボラ　私は中に入って、セアラを手伝って子供達を世話するわ。今すぐにもね！

（決然と意志の努力をしているかのように、硬くなって左方向に一步踏み出す。魅かれる気持ちと不安とが混じりながらサイモンを見詰めている。サイモン、手を伸ばしてデボラの片手を掴む。デボラ、身震いしながら、その場に釘付けになって立ちすくむ。口ごもりながら言う）

あなた——あなたは、好きになさい。ここに一人きりで闇の中になりたいなら——子供っぽい空想を夢見て——大の大人のあなたが！私の手を放して下さらない？私は中に入ってセアラを手伝いたい。

サイモン　（静かに）お母さんほどの生まれ育ちで、繊細な好みと夢見る詩人の魂を持った人が、あの雌と共通するものって何があるのです？

デボラ　あなたのことをあんなに深く愛してくれてる人のことをそんな風に言うなんて、卑劣だわ。

サイモン　僕の情婦のことですね。あの肉体の持つ値打ちの二倍も払わさ

れたのですよ —— 僕が今望んでいるのはただ、永久にあいつを追っ払いたいです。

デボラ (自分自身と闘いながら) だめよ！ 私を騙さないで！ セアラの方があなたにうんざりしてるのよ。本当に、どんな女でも嫌い抜くわよ。人生を奴隷市場にして、貪欲で無情な商人に成り下がったあなたみたいな人なら ——！（復讐心を込めて）あなたのかねてのお望み通り、私達その自由とやらをあなたに差し上げましょう！

サイモン (堅苦しく) そうなのか、分かってもらえないかなあ。セアラから逃れて、またお母さんの息子だけになれたらって、僕がどんなに一生懸命願っているか！

デボラ まあ、どうしたらそんな嘘がつけるの？ —— 何時間も何時間も私をここで待たせておいて —— その間セアラに抱かれていたくせに —— ああ、どれだけあなたを憎んだことか！ あなたを身ごもった夜を、あなたが生まれた朝を、どれだけ呪ったことか！

サイモン どうしようもなかったですよ。セアラはとても美しいし、お母さんを待たせていたのもセアラへの支払いの一部に要求されたことだったんですよ。それに忘れないで欲しいのは、会社でセアラと一緒にいると、僕はセアラの人生の中で生きて、セアラは僕の人生の中で生きているということです。僕はセアラのサイモンで、お母さんのサイモンではない。そんなで、どうやったらお母さんのことを思い出したいと思えますか？

デボラ (硬くなって —— 立ち上がろうとするができない) それで、そんなことが言い訳になると ——

サイモン セアラが侵入してくる以前いつも一緒にいたように、今ちょうどここで —— お母さんと一緒にいるじゃあないですか —— (堅苦しいが静かに、同じ口調で続ける) お母さんはセアラの

本性をよく知っているから分かるでしょう。あの腕の中でそのかさされたのですよ。お母さんが馬鹿な年寄りみたいに待っているのを想像して一緒に笑うように——

デボラ （凄まじく激怒して）セアラの笑い声が聞こえるようだわ！あの破廉恥なあばずれ！でも、私とセアラが両方とも生きている限り平和はないでしょう！（怯えて言葉を切る）

サイモン もしセアラが、急な正面階段を降りかけている時、誰かがつまずいてセアラにぶつかったとしたら、もし——

デボラ （震えて小さな声で）サイモン！

サイモン ええ、僕も同じ考えですよ。それだと不確か過ぎる。

デボラ （恐怖で混乱して口ごもる）同じ考え？ 私は絶対にそんなこと——！

サイモン 毒の方が確かそうですね。それに、僕らのように社会的地位も高く裕福な家だと、誰も疑いませんよ。病死ということになるでしょうね。

デボラ サイモン！ まあ、本当に、あなた狂ってしまったのね？

サイモン いいえ。全くその逆で極めて正気です。僕が心底願っているのは、ありのままに生きることです。それは違う自分を偽善的に装ってみたり、軟弱さ故に本来の自分を感傷的かつ道徳的に避けてみたりする。そのせいで、ありのままに生きることが、その背後に隠されてしまう。だから、ある種の行為がいかにもひどい呼ばれ方をされようが、僕は全く怖れない。そういう行為はそれ自体完璧に合理的だから——例えば敵を殺すこと。殺人についての我々の臆病な道德規範全体とは、人間の生命には価値があり、それが非常に素晴らしい意味とつながっていると信じている。しかしそれはつまらない虚栄心から生じた愚かで気違いじみた衝動に過ぎないのです。だが、明らかに人間の生命などいかなる意味をも持たない——人生とは愚かしい失望に

過ぎない。嘘つきがする約束であり、契約もしていない負債のために永久に破産すること。幸福と平和に出会うようにと絶えず約束を交わし、一縷の望みをはかなくも抱いて、来る日も来る日も待ち続け、やっと約束の花嫁なり花婿が至り来たれし時、実は死神とキスしているという訳です。

デボラ やめて！ いやよ！

サイモン また或いは、お伽話に取り憑かれて、魔法の扉なり、失われた幸せの王国なりを求めて人生を過ごすことになる——

デボラ (急にからかう口調になって) ああ、またあの子供じみた戯言をくどくど繰り返すつもりなら——

サイモン そして扉が見つかったも、その前に立って物乞いとなるのです。でも、扉は決して開かない。やがてついには我々は死んでしまい、人生という名の飢えたごみあさりの豚野郎どもが我々の死肉を貪り食うのさ！

デボラ サイモン！ そんな顔しないで！ 怖いわ！

サイモン (静かな声に戻って) 賢明に考えるなら、我々を殺してくれる誰にでも感謝を表明し、相応の謝礼をするという条項を遺言に一筆入れるべきです。殺人者とは真に上質な慈悲を持っているのですから。(冷笑気味にくっくと笑う) という訳で、どれだけの代償を払ってでも、お母さんが実際考えていることに直面しないで、逃げ通してきたとは分かってはいるけれど——

デボラ (奇妙に侮って) あなたって馬鹿よ！ あなたが考えてきたのと同じことを、私が一度も考えたことがないと言っても言う言い方して。

サイモン では、お母さんが今なぜその考えに身震いしているのか、僕には分からない。

デボラ 夢に過ぎなかったからよ。でも今や現実になろうとしている——あなたが私の心に思い出させたから。私の意志の中でも

生まれ出て、生き始めてくる。そして実行へと真っ直ぐに向かいかけている。そしてやがてある日、セアラの若い肉体ときれいな顔とを憎み、階段のつぺんまでついて行って——！
或いは、庭師が害虫を殺すために砒素を地下室に保存しているのを思い出す——（意図的にぱっと立ち上がる）あなた、狂っている！ あなたと二人だけでいるのは怖い！（手をぐいと引っ張って）放して！ セアラを呼ぶわよ！（呼ぶ）セアラ！セアラ！

サイモン（手を掴んだまま——静かに）セアラには聞こえませんよ。（デボラを優しく引き寄せる——静かに）さあ。座って、お母さん。僕やお母さんがセアラと何の関係があるのですか——？（デボラは弱々しく、なされるがままに引っ張られて彼の隣りに座る）僕がお母さんを選んだと、はっきりさせようと努力しているのが分からないのですか？

デボラ（顔が熱烈な喜びでぱっと明るくなる）それじゃあ、本気——本当に本気なの——？ ええ、分かっていたわ！ 最後には私が勝つて分かっていたのよ！ ああ、私の息子！ 愛しい息子！（それから怯えて）でも、殺人は——殺人はだめ——しないって約束してね——

サイモン しません。方法は別にもあります。セアラをここに置いて去るのです。僕達ははるか彼方に一緒に行くのです。現実から遠く離れたところ。セアラの記憶ですら付いて来れない。遠すぎて僕の心も苛まれなくらい。お母さんはあのドアを開けさえすればいい——（魅入られたように切望と共に目があずまやのドアに釘付けになる）

デボラ（同じ恐怖と切望でドアを見詰める——無理に軽口調で）さあ、ほら、あの子供じみた空想の戯言なんか、もう二度とくどくど言い始めてはいけませんよ！

サイモン 僕は小さな子供だった頃から待ち続けてきました。その時からずっと僕は心の中で、そのドアの外に立ってきたのです。平安と信頼と愛のあったあの人生に、もう一度戻らせてって懇願しながら！ お母さんは昔僕を追い払った。その時からいろいろなことが始まったのです。さあ今、お母さんは選択するのです。その昔僕に対してした選択を撤回して、僕から奪い去った信頼を返してくれるか、でないと僕はセアラを選びます！

デボラ いや！

サイモン それでは、お母さんに残された道とは、再びあそこに駆けて行き、あの中に隠れること。そして、自分から逃れるために、夢見ながら狂気の館へと入ってゆくことですね！

デボラ (怯えて) サイモン！ お願いだわ。何にもましてあなたを愛している母親に向かって、どうしたらそんなことが言えるの！ まるであなたが願っているのは——

サイモン 願ってるのは自由になること！—— 僕の精神の中にいる二つの自我の片方から、つまり、相争う敵同士の片方から解放されて自由になりたい。僕を所有しようと決闘されて破壊されないうちに。僕にはもう選ぶしか手段がありません。或いは、僕が狂った方がいいですか—— もう一度僕を排除できるようにと？

デボラ (身震いして) 違うわ！ ああ、どうしたらそんなことが言えるの——？ もう狂ってしまったのね——！

サイモン (冷たく) 無理やりセアラを選ばせようとしていますね。(デボラの手を振り払う) 結構ですよ。セアラのところに行きましょう。ついて来たりしないで下さいよ。昔僕がされたように、僕もお母さんを締め出しますからね。逃げ出すためにお母さんがすべきこと、それをする時まで、ここに一人で残ればいい。王の高級娼婦たる愚かしい夢で、きっと幸せになれますよ。僕は

自由になって、身も心もセアラのものになります。さようなら、お母さん。（向きを変えて去りかける）

デボラ （サイモンの手を掴んで —— 半狂乱に懇願する）いやよ！
お願い！ 何でも望み通りにするわ。（ドアに向かってサイモンを一步導く —— それからたじろいで、子供を説得するように、しゃにむに反論を始める）でも —— 一人前の大人のあなたが —— 本当の現実にしようなんて —— あなたを笑わせるために、空き時間に作った昔のお伽話なのに！

サイモン そんなのは嘘だって自分で分かっているくせに！ 僕を愛することがいやでたまらないと僕に悟らせるために作ったんだ。所有されるのがいやで、自由になりたかったからだ！

デボラ それにしても、あんな馬鹿げた物語の扉と現実の木のドアと結びつけるなんて —— 本当に狂ってるわ、サイモン。

サイモン （張りつめた様子で）それが現実の木のドアだとはよく分かっていますよ —— でも、僕達の内面にあるもっと深い現実の中では、僕達の心が与えた意味を持っているんだ。お母さんがドアを開けるのは、必要不可欠な物理的行為です。そうしたらお母さんの心が僕をその愛の中へと連れ戻してくれる。そして、僕だけを愛してくれた、僕だけが愛していた母親にもう一度なるんだ！（急にぎこちないが優しくデボラに微笑みかける）だからね、一切は完璧に理にかなった筋の通った話で、狂ったものなんてないのですよ。お母さんが作った物語にある平安と幸福の王国とは愛のことですよね。お母さんは僕を排除した時、自分をも排除したのです。その時から僕達は二人とも代わりを求めて飽くなき欲望を持つように運命付けられたのです —— （再び心奪われてドアを見詰める）でも、あのドアを開ければすむのです、お母さん —— あれは本当はお母さんの心の中にある扉と同じ ——

デボラ (身震いして) 分かるわ! —— それ逃避へと導いてくれることも。よく分かっているわ!

サイモン (デボラの手を軽く叩く —— 優しく説得するが、目はドアに固定されている) あんな下らない恐怖なんか忘れて。僕達は恐れなどなかった頃に還っているのですよ。セアラが僕の中に存在する前、僕が彼女の中に存在する前のこと。お母さんのこの庭で、あのお伽話をしてもらった。あの頃に戻っているんだ。(言葉を止める —— それから、辛辣で復讐心に満ちた非難を込めて食い下がる) 僕は絶対に忘れない。あの苦悶に満ちた感覚。突然裏切られ、傷付けられて見捨てられ、人生にたった一人残された。人生には、安全も信頼も愛もなく、危険と猜疑心、そして獐猛な貪欲があるだけだった! あの時は心底お母さんを憎んだよ! 死んでくれればいいのにつて! 自分なんて生まれてこなければよかったのにつて思った!

デボラ (残酷な満足を、明らかにうわべだけの後悔の態度で僅かに覆い隠して) あら、そうだったの? 傷つけたならごめんなさい。私がどんなつもりなのか察して欲しかったの。それは本当。あなたったらとても頑固で貪欲な子供だったのよ。私の魂のあらゆる秘密や私だけの場所を、あなたの指が執拗に隅々まで探るのが感じられた。だから、あなたに警告する手段が必要だった。それであのお伽話を考えたの —— (突然自分に対する恐怖の表情に変わる —— 取り乱して) 違う! そんなつもりではなかった —— ! あなたに吹き込まれたせいよ! こんな恐ろしいことを言わせるなんて、あなた、狂ってる! それに、どうやったら、自分の母親を憎んだり、死んで欲しいと思ったなんてことが認められるの!

サイモン (烈しい思いを込めて) 僕の願いは唯一つ。昔に戻って変えて欲しいだけだ —— あの結末を変えて —— 扉を開けて僕を連

れ戻して——お母さんと僕と二人だけになるんだ！僕達には死ぬまでは平安と幸福があるんだ！僕の言うことを信じて、母さん！僕には分かっているんだ。

デボラ （魅入られたようにドアを見詰めて）ああ、そうできたらねえ！信じることができさえすれば！分かって欲しいわ。私がどんなにあなたを取り戻したいと必死に願ったことか。私だけのものだと知りたくて。そうよ！今なら信じられる——もし心が十分に強い愛と共に望んだら、その心の願い通りの人生にできる。必要とあらば、地獄から天国を創り出すことさえ可能なのよ！

サイモン そうなんだ。もし骨肉相食む争いや、情欲が愛を貪ってしまう現実が正気だとするなら、そうなら、誇り高い精神を持つ人間なら狂気だと思われる方を望まない訳がない！さあ、お母さん！情欲や憎しみ、殺意に満ちたこの忌わしい場所から離れましょう！平安へと逃げ戻るのです——間に合ううちに！

デボラ （無理に熱心そうなそぶりで階段を一段上がる）そうね——考えられないうちに——さあ、いらっしゃい。

サイモン 僕達は離れる前の昔に戻っていくんだ。もう一度一体になれる。（不意に動揺して）でも、急いで、母さん！早く！誰かやって来る音がする！

（デボラは体を動かし、サイモンの前に保護するように立つ。右手をドアの取っ手にかけている。セアラが左手から急いで入って来る。危惧と恐怖で狼狽状態である。二人がまだあずまやの外にいと知って、デボラに対する激怒へと変わる）

セアラ （デボラに向かって）この嘘つき！こそ泥！裏切り者！二人きりでおいてくなんて、馬鹿な真似するんじゃない

——でも、ああ、よかった。間に合ったわ！

デボラ (静かな声で嘲って) そうね。間に合った —— 別れを告げるのに！

セアラ サイモン！ こっちへ来るのよ！ ほんの少し残った正気までなくしたいの？

(しかし、サイモンにはセアラの声が聞こえていなかったような、或いは彼女が来たことにも気付かなかったかのようなのである。彼はずっと母親の背後にいて、セアラに対して横向きの姿勢。目は魅入られたようにドアに釘付けである)

デボラ (目をセアラに向けたまま、サイモンに向かって呼びかける) ねえ、もうこの女のことなんか覚えてないわね、そうでしょう？

サイモン (セアラの方に頭を向けるが、誰だか認識できない。異様で狂った忘我状態の表情。従順に呟く) うん、分からないよ、母さん。(セアラに向かって言う) よくもずうずうしくここに侵入できたな。母さんのこの庭が売春宿とでも思ってるのか？

セアラ (打ちのめされたかのようにすくむ —— 打ちひしがれて) サイモン！ そんな言い方しないで —— 狂ってしまったのね！

サイモン (傲慢に) 立ち去れ！ 警察を呼ぶ前にだ！ (右手の壁にあるドアを指さして) あのドアは通りに通じている。あそこに戻って自分の売春商売に精を出すがいい。

セアラ あなた！ 私よ！ あなたのセアラよ！

デボラ (満足気に —— 高慢に) 私の息子の命令よ！ (サイモンに向かって) でもね、私達がこの女を置き去りにする方が簡単ではないかしら。

サイモン (熱心に) そうだよ、母さん。行こうよ！

デボラ （得意満面に） そうね！ 今なら行けるわ！ 例え、気まぐれでだって人生から欲しいものは手に入れて持って行く。そのための代償なんていくらだってかまいやしない！

（デボラは笑い、不意に背後でドアをぐいと開ける。ドアは後方の壁に当たる。サイモンが喘ぐように待ち焦がれた叫び声を上げ、前のめりになって、中の闇に目を凝らす。だが、デボラはあずまやの内部に向かわず、セアラと対峙したまま）

セアラ （狂乱して） やめて！（駆け上がって、デボラのスカートを掴み、その前に跪く） どうかお願い、憐みをかけて！

デボラ 憐み？ 今頃憐みを思い出せと？ このずる賢いあはずれが。

セアラ （懇願して） 私のためじゃないわ。この人のために憐みをお願いしてるのよ！ 愛しているのでしょうか？ こんなことできない筈だわ！

デボラ 愛とは誇りであって憐みではない！ 放すのよ！（スカートを蹴ってセアラの手を払う。サイモンの腕を掴み、ドアの方に半身を向ける） さあ、おいで！ 早く！ この女の愛やら憐みやらという嘘っぱちが聞こえない所に行きましょう！

サイモン （あずまやの内部を凝視していたが、頭を僅か振り向けて——ぼんやりと不安そうに） 母さん、誰と話してるの？ 僕に何を思い出させたいの？ 昔に戻っているのに。母さん以外、他に誰もいなかった昔に。

デボラ （残虐さと侮蔑を示しながらも、同時に不安そうに） ええ。この女の言うでたらめの頼み事など聞いてられないわ！ さあ、行きましょう——

セアラ （再び夢中でデボラのスカートを掴む） やめて！ 待って！ 聞いて、デボラ！ 私が諦める！ 私の負けよ！（体を前に投

げ出して、デボラの両足に両手ですがる —— 懇願して) デボラ! やめて! サイモンを返すわ! 私が出て行く! 二度と邪魔しない! 望みはそれだけだわね、そうでしょう?

デボラ (自分の耳が信じられずにセアラを見詰める) 本当に本気で言ってるの —— 諦めるって —— 出て行くって —— ?

セアラ そうよ —— サイモンを愛しているから —— 救うために。書類は全部に署名してあなたに譲り渡すわ。昔の農園だけは下さい。子供達のために家を持って、一緒に暮らすわ。子供達を明日そこへ連れて行きます。(疲れ果ててゆっくりと立ち上がる)

サイモン (ずっと張りつめて身じろぎもせず、あずまの闇を見詰めている。デボラの手を引っ張って、不安そうな小さな声で子供っぽく言う) 母さん、どうしてぐずぐずしてるの? ぐずぐずしちゃだめだよ —— 間に合わないよ!

(二人の女性には聞こえていない様子である)

セアラ あなたにも分かるわよね。その人を救うために諦める女が一番その人を愛しているって!

デボラ (嘲笑して) まあ、なんて恥知らずな謙虚ぶりなこと!

セアラ 私が謙虚になれるとしたら、それは私自身と彼への愛によってであって、あなたによってではないわ。私がいなくても彼が幸せであって欲しい。本気よ! そう、あなたにも幸せでいて欲しいとさえ願える。そうしたら彼を幸せにできるのだから!

デボラ (異様に抑えた憤怒を込めて) あなたの企みが見えてきたわ —— 私に卑劣だと思わせたいのね ——

セアラ (疲れ果てて静かに) 企みどころではないって言ったでしょう。じゃあ、私、出て行くわね。子供達を起こしてホテルにでも連れて行くわ。彼に見つからない所へね。私を忘れるためのうま

い口実を言ってあげてね。あなたと二人だけなら平安を取り戻せる。必要なのはそれだけね。（向きを変えて、左手から去ろうとする——サイモンを見ないで途切れ途切れに）サイモン、あなた。あなたがくれた喜びと愛の全てに対して、神様が祝福して下さり、あなたに平安と幸福を与えて下さいますように！

サイモン（混乱と不安とで）母さん！ 誰か呼んでるよ！ これ以上ここにいられない！ 早く、母さん！

セアラ さようなら、デボラ。（歩き去ろうとする）

デボラ セアラ——待って——許して——言いたいのは——私の感謝を——あなたに言いたい——あなたは美しくて立派——ずっとずっと立派——私よりも——（嫉妬と激怒が爆発するかのようになり、憎悪に満ちてセアラを睨み付ける）忌々しい！ お前が気高く愛情溢れる女で！ 私は息子の人生を独占したがる悪い女！ まるでお前のような卑しい淫らなものでさえ、私がサイモンに対して持っている深い愛情を理解できるみたいじゃないの！ でも、証明してあげるわ。私達のどちらが最後に勝つのか、彼を一番愛しているのは誰なのか！（向きを変え、戸口の中の暗闇に立ち向かう）

サイモン（待ち望んで叫ぶ）母さん！ やっとだね！

セアラ（怯えて）サイモン！

デボラ（自分の手を荒々しく彼の手から引き離す）だめ！ 私一人だけよ！

サイモン（絶望して——デボラの手を掴む）母さん！

デボラ（彼の手を振り払う——異様な誇りに満ちた尊大さで）私だけって言ったでしょう！ いつもそうだったように！ 私の自尊心と誇り故に常にあるとしてきたように！ 私に触れないで！ 妻の脂ぎった腕に戻りなさい！（力いっぱいサイモンの胸を押す。そのために彼はバランスを失い、階段を転がり落

ち、重たげに倒れ、池の左手にあるベンチのそばでじっと横たわる。デボラは向きを変え、敷居に立ち、暗闇と対峙している——自己蔑視的に笑う) 怖れているのね、私は! ああ、私を待って歓迎してくれるのは、最後にはこの誇りだけ! (静かに中に入り、ドアを閉じる)

セアラ

(サイモンのそばに駆け寄って膝をつき、彼の頭を持ち上げている。デボラが去ったことに気付いていない) あなた! 怪我がひどいの? サイモン! ああ、助けて! 何か言って、あなた! (パニック状態で片手を彼の心臓にあてる——ほっと安心して) 違った。気絶してるだけだわ。(彼の手首をさすり始まる) 多分それが一番ね。気絶してなければ、あの中に入ろうとしてるでしょうから。(彼の手首をさするのを止め、振り返ってあずまやを見詰める——畏怖と恐れと共に小声で) 何ということ。あの人、やってしまった! ああ、最後には認められない。あなたは偉大で気高い貴婦人です。勝ったのはあなただわ。愛のためにあなたの誇りが払った犠牲とは、私の誇りなどではどうしても払えないくらい大きい! (身震いする) 今なら分かる。私の中にある貪欲さと、父親の狂った夢のために、サイモンを自分自身から離れさせていった。やがては道を見失い、内面に持っている最上のもを破壊させ始めてしまった! この人を私が誇りに思うためにさせたこと! ああ、許してね、あなた! でも、これからは私は自分の人生を投げ出して、あなたを自由にしてあげる。初めて会った時のあなたにもう一度なれるように——私が一番愛していたあの頃のあなたに——魂に詩人の血と子供心を持っていたあなたに! (自虐的と言えるほどの満足感を以て) 分かっているわ、あなた、あなたが一生懸命願っていること。会社を粉みじんに壊滅させて、貪欲さから自由にしてあげること! ええ、誓うわ、私の

愛の証明よ。会社を潰してみせる。そうしたら誘惑もなくなるもの！ 簡単よ。テナードに会社の現状をちょっと小声で噂するだけでいい。（満足気に微笑んで）テナードの胸中にある復讐の音が聞こえるわ。私達の敵全員のところへ笑いながら駆け出して行って喋るわね。敵達と一緒に私達に飛び掛かって滅ぼすでしょう！ でも、いずれにしても、あの昔の農園までは取り上げられない。私達はそこに暮らして、子供達は一緒に働いてくれるわ。あなたは、また私への愛を詩に書けるようになる。あの本の計画も立てられるわ、世界を助け、人々の中にある貪欲という呪いから解放してあげるという内容の本。（後ろめたそうに言葉を切る）まあ、ごめんなさい。考えただけで幸せ。それに私が払う代償なんて、デボラ、あなたに比べれば何でもないくらいよ！（急に現実的計算へと考えを変える）そうそう、噂話を始める前に、会社の現金を銀行から全部引き出してデボラの名義にするわ。この家も。ジョウエルに管理してもらって。そうしたら、デボラがここで庭と一緒に暮らすには充分残るわね。立派なお屋敷に住む偉大な女王に相応しいだけの快適さと富、贅沢さと。亡くなるまで夢を見続けることができるように。

（セアラがこのセリフの最後部分を言っている間に、あずまやのドアがゆっくりと開き、デボラの姿が現れている。彼女は階段の一番上に立っている。その目は、静かで動かず、何も見えてないような恍惚状態。だが、顔は誇り高く自信に満ちて尊大。そして幸福そうである。美しく穏やかで、ずっと何歳も若く見える）

デボラ （高慢な命令口調で）話しているのは誰？ お前、よくここに来ましたね？

セアラ (ぎくっと驚いてデボラを見詰める —— 恐ろしそうに小声で言う) ああ、何ということ。かわいそうに!

デボラ (階段を降りて来る —— 同時にセアラはサイモンの頭を草の上に戻して立ち上がる。セアラが誰か分かった表情が顔に現れる —— 王者たる威厳と、目下の者に対する気さくな様子と共に) ああ、お前は確かあのアイルランド人の台所女中だったわね? (姿勢を正して尊大かつ優雅に、頭をぐっと高く上げて、セアラに近付く) なぜこんな時間に王宮の地所にいるのです? 私の領地に侵入したら、恐ろしい罰則があるのに。知らないのですか?

セアラ (彼女に調子を合わせて —— ぎこちなく召し使いのように礼儀正しく慎ましく話す) 分かっております。ここに入れる何の資格もございません。奥様。

デボラ この庭は、皇帝から賜った贈り物。(満足そうにかすかに笑うが、不意に —— 鋭い声で疑うように) なぜ黙っているのです? 私が嘘を言っているとでも思うのですか?

セアラ そんなまさか、思いもよりません。陛下。

デボラ (安心し喜んで) 私は陛下ではありませんよ、哀れな人だこと。もちろん私の気まぐれだとしても —— (目を下に向けてサイモンを見る。びくっと驚くが無関心に) お前の足元に寝ている男、それは誰? 恋人? 死んでるの? 愛する余りに殺したのですか? ああ、怖がらなくてもいいのです。全て心得ていますよ。女は愛するが故に、どのようなことも強いて望めるものなのです。愛を証明するためには自らを殺めることさえできるのです。それがため、かくも誇り高くいられるのです。

セアラ (静かに) きっと心得ておられると分かっております。奥様。(デボラを見詰める。突然デボラが演技をしているのではないかと疑い怖れて顔が震える。デボラの腕を掴んで口ごもりなが

ら言う）デボラ、お願い、演技をしてるだけじゃないわよね—— 彼のためにお願ひ。彼を救って自由にしてあげて！ これでは余りにも犠牲が大き過ぎる——

デボラ （高慢な怒りを以って——セアラの手を腕から引き離す）生意気にも私に触れてよいなどと思っではなりません！ お前の恋人を連れ去り、二度とここに戻っては来ないように！

セアラ かしこまりました、奥様。でも——教えて下さいませ。奥様、今お幸せですか？

デボラ （目下に対する気さくな態度で）おこがましい人だこと。でも許してあげましょう。私は心底幸せだもの。（高慢に片手を差し伸べて）跪いて、この手にキスを許します。

セアラ （自尊心を侮辱されたという閃きが目に現れ、一瞬怒りで立ち去ろうとする——それから衝動的に跪き、彼女の手にキスをする）この上ないお優しさ、感謝いたします。奥様。（デボラはセアラに背を向けて階段を上がる。セアラ、かすれた声で付け加える）そして神様の祝福がありますように。

デボラ （階段を登りながら、威厳と理解とを含んで楽しげに微笑んで振り返る）まあ、ありがとう。いい人ね。神様はいつも私を祝福して下さいましたと思いますよ。（あずまやの中に入り、後ろ手でドアを閉める）

セアラ （後姿を見詰める——苦しそうに）分からない—— 一体—— ああ、どうしよう、何が真実なのか、今もこれからも全然分からない！

（サイモン、呻いて、かすかに動き、セアラを見上げる）

サイモン 母さん。早く！ 行こうよ。平安と幸福だよ。

セアラ （たちまち、サイモン以外に何もかも忘れて）ええ、あなた。

行きましょうね。さあ、いらっしやい。起きて。(身を屈め、彼が立ち上がるのを助けるために片腕を彼の肩に回す) そうそう、そうするのよ。

サイモン (ぼんやりと —— 幼児のように) 僕ね、転んで頭ぶつけたの、母さん。痛いよ。

セアラ 家に入ったら洗ってあげましょうね。さあ、いらっしやい。(サイモンの向きを変えて、左手の小道から退場させようと促す)

サイモン (ぼんやりと) うん、母さん。

セアラ (一生懸命に、自分のものに対するように優しく) そうね、今は母親にもなりましょうね。あなたの平安と幸福、人生であなたが必要とするもの、何にでもなりましょう! さあ。